

平成12年 2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会
青梅市郷土資料室
(青梅市駒木町1-684 Tel.0428-23-6859)

武蔵御嶽神社の奉納俳句

毎年2月11日に行われている武蔵御嶽神社の奉納俳句の催しが、昭和49年の第一回以来、本年度で第二十七回を迎える。この間、投稿句数約3,000句、多くの人々の参加を得て続けられてきたが、この催しも神社・寺院の持つ大切な一つであろう。

神社・仏閣はもちろん信仰の対象としてのものであるが、それが永く継承される要因は、その文化的役割による部分が多い。人々の健全な信仰は、常に高い文化的（文明的ではけしてない）欲求がある。本当の信仰とはそういうものでなければならない。そういう意味で、この奉納俳句も無形文化財の一つといえる。

選者は、昨年まで現代俳句協会会員で「霧の音」主宰の来住野臥丘先生であった。臥丘先生は、昨年米寿を迎えられたが、米寿を機に選者を退かれ、先生の推挙により秩父にお住まいの金子千侍先生の選により行われることになった。

臥丘先生の選は、誠に厳格で、公平なものであった。文芸に公平さを保つことは、並々ならぬ努力が必要で、まさに心血を注いで成される。ある年、私の俳句が佳作を戴いたことがあって、山上の一人から選んで頂いたお礼を申し上げたところ「私は、そういう選はしておりません。」と、お叱りを受けたことがある。先生に対しての非礼をお詫び申しあげるとともに、自分の卑屈さを大いに反省したことであった。俳句などの選は、所詮主観に左右されるという意見をままた聞くことがあるけれども、これは、文芸を文芸として理解しようとしないう判断で、決してそんな生易しいものではない。選者はそういう苦しみのなかで選句していることを、私たちは忘れてはならないだろう。

臥丘先生の選の基本は、一言でいえば、「単純」にあったように思う。単純という言葉は、今はあまり良い意味で用いられないが、「単」と「純」に分ければわかりやすい。「単」とは、芭蕉のいう「松のことは松にならえ」ということだろう。松は一本一本、一群ごとに同じものはないし、しかも刻々と変化する。それを見る側が、「松」という概念で一括りに見てしまつては、その前にある現実の松を見ることはできない。松の前で、松と一対一になれるように修練を重ねなければならない。「単」には、修練の末に行き着くことができる。それが、「松のことは松にならえ」である。「純」とは、実生活から文芸への純化、俗からの昇華だろう。臥丘先生の求める俳句は、ここにあるのではないか。そして、臥丘先生は、「俳句の専門家」になるという「俗」を常に恐れていたように思う。西行法師が、自分の作った和歌を道行く庶民に見せて和歌の良し悪しを求めたという逸話が風説として伝えられるが、文芸の真理の一側面を言当てているように思う。永い間の臥丘先生の御尽力に対して、選者詠の中から二句を誌して、先生への感謝の実を捧げたいと思う。

夢の又 夢見て二日 坊泊まり
悪がらす 初鴉とて 詠まれけり

(文責 金井)